Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2022, Vol.31, 229-235

報告

自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける子どもの育成

－題材の特質に応じた造形的な見方・考え方の具体化による授業実践－

奥　　俊 明［鹿児島大学教育学部附属小学校］

Fostering Children Who Continue to Create their Own Modeling Meaning and Value: Class Practice by Embodying a Modeling Perspective and Way of Thinking According to the Characteristics of the Subject

OKU Toshiaki

キーワード：感動、造形的な見方・考え方、思考方法、授業への具体化、表現と鑑賞

1. 実践の目的

1.1. 実践の背景

学習指導要領が改定され，各教科で働かせる見方・考え方が明確に出された。結果，各教科の本質を明らかにしながら，授業を実践していくことができるようになってきた。一方で，見方・考え方は，教科の本質を端的に示せる反面，子どもが各題材で働かせている様相については，十分に示しきることができていないと考えた。

そこで，図画工作科の造形的な見方・考え方を基に，図画工作科の授業実践を通して，具体化する過程を明確にしながら，他の授業に汎用化できないか実践を試みることにした。

1.2. 実践の方向

本実践では，これまでの実践で目標にしてきた「自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける子どもの育成」を念頭におき，題材の特質に応じた造形的な見方・考え方の具体化を図り，その過程を明らかにしていく。そして，今後，同様の過程で実践を繰り返しながら，その過程の汎用化を図り，具体的な視点や考え方を整理していきたい。

本実践の前提に，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第 30 巻 奥（2021）で整理したように「感動」は「魅了・興奮・歓喜する姿」と捉え，「思考方法」については，図 1 のように整理した（図 1）。

これらを基に，本実践において，造形的な見方・考え方を具体化し，その道筋を明確にする実践を行い，報告する。

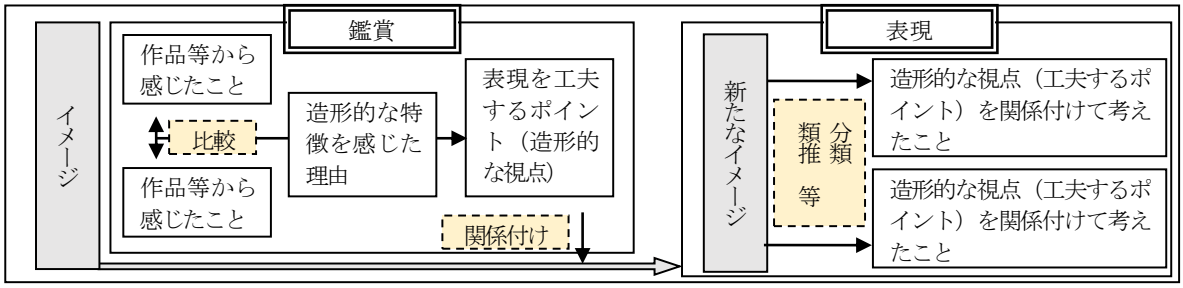


図 1　表現と鑑賞場面における思考方法

2. 実践の具体

2.1. 実践の視点

自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける授業にするために，以下のような，実践の視点を設定した。

① 魅了・興奮・歓喜といった感動を味わっている子どもの姿の表出

② 図画工作科の特質に応じた思考方法【相違・共通・拡散・多面・直観・見通し】を用いて創造的な思考を発揮しながら，表現を工夫する子どもの姿の表出

③ 学びの可視化による，自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしたことを自覚する子どもの姿の表出

2.2. 実践の考察方法

（１）の①～③について，子どもの言動やアイデアスケッチ，作品などを基に分析していく。その際，子どもの表現や思考の様子の変容が分かるように，追跡児童を設定し考察する。

2.3. 実践の題材の概要

本題材は，片面段ボールの特徴を生かして，自分なりの塔を表現し，友達と場を構成しながら塔の街をつくる楽しさを味わう工作の学習である。

主材料となる片面段ボールは，片面がつるつるした形状で，もう片面は，でこぼこした形状になっており，模様や加工のしやすさの違いを味わうことができる。また，塔をつくるという主題の下，高さや塔を構成する柱などの形なども工夫することができる。

そこで，題材の主題や発達の段階，材料，塔の構成要素などを踏まえ，形の組合せや模様，高さ，曲げる向きといった造形的な視点を中心に理解できるようにしていく。

2.4. 実践の題材で目指す子どもの姿

学習指導要領図画工作科編で示されている「気付く・分かる・理解する」といった子どもの認識の仕方を図２のように整理している（図２）。この子どもの姿を基に，第６学年における本題材の目指す子どもの姿を具体化した。

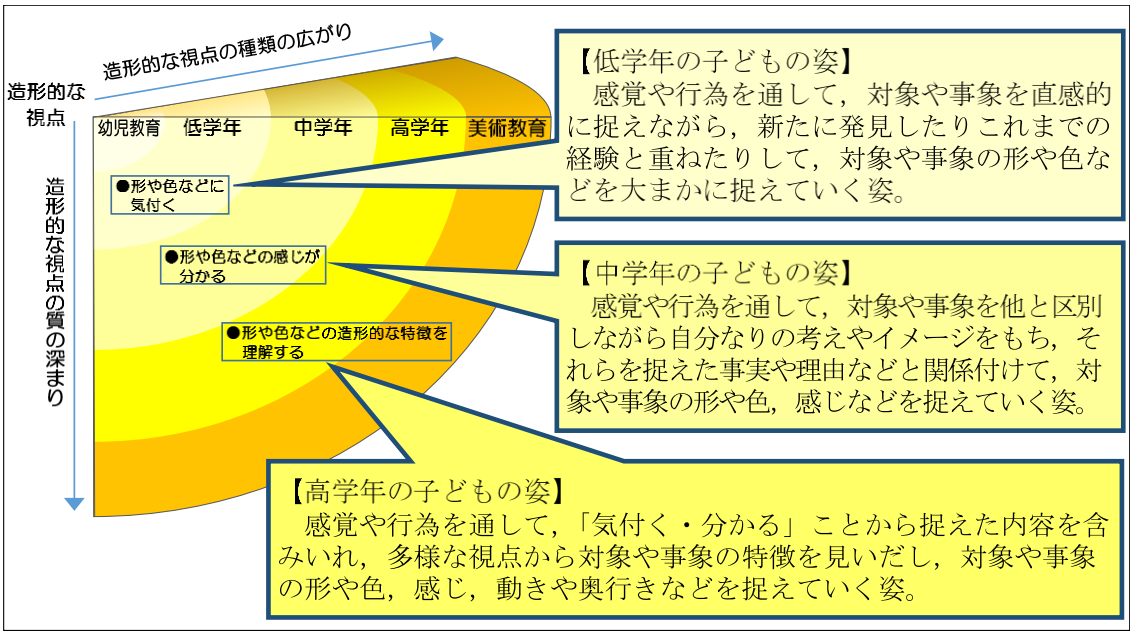


図２　造形的な視点への「気付く・分かる・理解する」具体的な子どもの姿

2.5. 実践の具体化

実践の具体化として，図３のように構造化して整理した（図２）。

手順①　視点と思考方法を分析し，授業の具体化に生かす

想定

目標及び学習内容を分析

感覚や行為を通して，形の組合せや模様，高さ，曲げる向きなどの造形的な視点を理解する。

子どもの実態

・　片面段ボールの特徴を生かしきれていない。
・　様々な造形的な視点を組み合わせて表現

造形的な見方・考え方

感性や想像力を働かせ，対象や事象を，形や色などの造形的な視点で捉え，自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと

具体化

視点

【題材で中心となる造形的な視点】

☆　形や色などの造形的な特徴

↓

題材の主題や発達の段階，材料，塔の構成要素から見いだした

◎　形の組合せ　◎　曲げる向き
◎　高さ　◎　模様

思考方法

【比較して相違点や共通点を見いだす】

★　自分の表現と教師・友達の表現とを比較して，感じたことやその理由を明らかにする。→相違・共通・直観・多面

★　感じたことやその理由から造形的な視点を見いだす。→多面・見通し

【広げて見通す】

★　自分のイメージに造形的な視点を関係付けて，イメージを豊かにする。
→多面・拡散・見通し

手順②　授業における具体的な働きかけ

構造化

学習内容設定の要素である「テーマ」「材料・用具・場所」「造形活動」を基に，２年次研究と関連させ，以下のような学習内容に具体化した。

○　思いやイメージをもち活動に夢中になることができるテーマ
「片面段ボールのよさを生かして，すてきな塔の街をつくろう。」

○　経験と関連付けることに働きかける材料・用具・場所
「通常の段ボールの片面を剥がした片面段ボール」

○　自己・他者との対話が生まれる造形活動
「参考作品・相互の比較鑑賞，材料を多面的に捉える試作活動」

そして，上記の内容を基に，以下のような働きかけを具体化した。
『鑑賞や試作活動で感じたこととその理由を明確にする発問』
『造形的な視点とイメージとを関係付ける声かけや板書』
『明確にした造形的な視点をアイデアスケッチへの加筆する時間の設定』

手順③　学びの過程をどのように振り返らせるのか

俯瞰

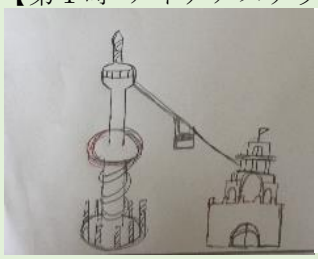
○　図工ノートを活用しアイデアスケッチを加除修正させながら，ポートフォリオとして学びの過程を可視化
○　板書を構造的に示し，思考の過程を子どもと可視化

図３　実践の具体化

2.6. 実践の様子

実践の様子として，図４～図６のように整理した（図４～図６）。

【第１時 アイデアスケッチ】　※　実践の視点①～③に沿ってＡ児の姿を整理した



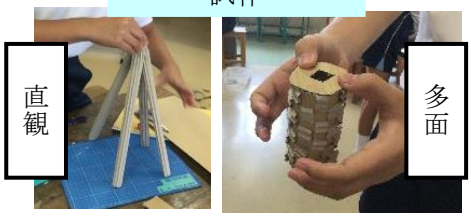
① 現段階で，「近代的な塔と古代的な塔のツインタワーを表現したい」という思いをもち，制作できることに歓喜・興奮していた。
② 片面段ボールのよさを生かしてみんなで塔の街をつくるという題材の方向性を理解し，最初の段階の塔への思いやイメージをもっていた。
② これまでの塔のイメージや直観的に捉えている自分なりのイメージを関連させ，左記のようなアイデアスケッチを表現していた。

1 2 3 4 5 6 7 8 時　【工夫するための造形的な視点を見いだす場面】

参考作品の鑑賞

T：この作品を鑑賞してどのようなことを感じますか。
A児：すごく迫力があるな。見ていてきれいだな。（魅了）
T：なぜ，迫力や美しさ感じるのかな。
A児：どの塔も，柱がいくつも積み重なって，**高さ**があるから。【共通】
C：この塔は，段ボールの**模様**を生かして曲げたり組み合わせたりしているからかな。【相違】
C：あっ，塔の先が**とがっている**と塔らしく見えるな。【直観】

試作



T：試作してみてどのようなことを感じますか。
A児：あれ？思っていたより柔らかくて曲げやすい。（興奮）
C：**曲げやすい向き**があるね。【多面】
C：**表と裏を組合わせて模様**をつくって柱に貼ってみたよ。【多面】
C：すごい，**斜めに切って丸めると，塔のような形**になったよ。（歓喜）【直観】
A児：これ，**塔の柱の形**に使えそうだな。（歓喜）【直観】

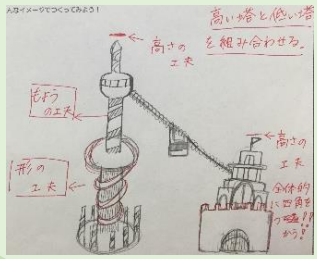
見通し　拡散

感じた理由や行為を基に工夫するポイントを見いだす

○形の組合せ　○模様　○高さ　○曲げる向き

Tは教諭
CはA児以外の子ども

【アイデアスケッチの修正】



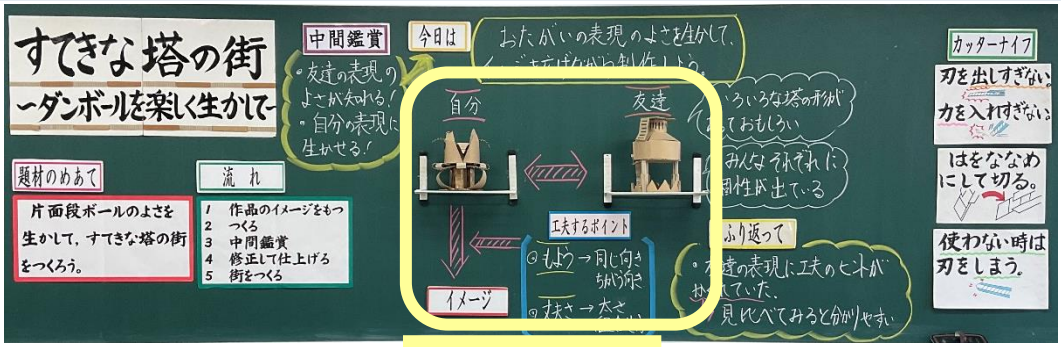
① 鑑賞や試作といった，自分の諸感覚を働かせて造形活動を行うことで，材料の面白さに魅了・興奮・歓喜している姿があった。
② 参考作品の鑑賞や試作を通して見いだした造形的な視点の中で，**柱の形・模様・高さ**を自分のイメージと関係付けてイメージを広げながら，アイデアスケッチに表現していた。
③ 試作したことで，必要な技能面や困難さを実感し，今後必要な材料や用具を見通し，制作意欲を高めていた。

図４　実践の具体化

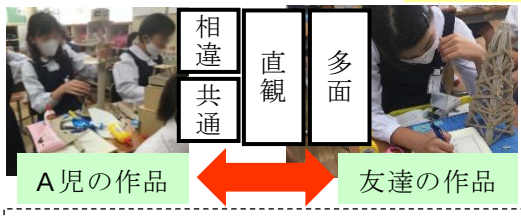
【アイデアスケッチを基に制作】

① 材料の特徴を生かして塔が立ち上がっていくことに，友達とともに歓喜し，意欲的に制作に取り組んでいた。
② 実際に制作を始め，イメージに合わせて一つの塔ができつつある。しかし，バランスがとれずぐらぐらするという**丈夫さについての課題**をもっていた。
③ 友達の表現や考えが新たな造形的な視点を見いだすことができるという学び方をもっているので，鑑賞意欲が高まっていた。

1 2 3 4 **5** 6 7 8 時　【相互鑑賞しながら表現していく場面】



相互鑑賞



A児の作品　友達の作品

T：友達の作品を鑑賞してどのようなことを感じますか。
A児：いろいろな**塔の形**があって面白いな。（魅了）【相違】【共通】【多面】
C：みんなで組み合わせると楽しそう。

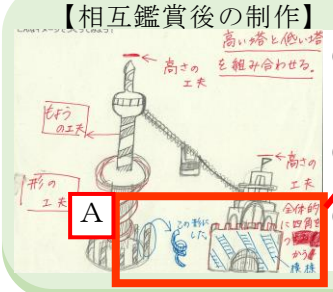
T：なぜ，いろいろな形をつくりだすことができたのだろう。
A児：どの塔も柱や壁の周りの**模様**が工夫されているからだね。【共通】
C：**巻きつけ方**にも違いがあるね。【相違】
C：同じ方向に**巻き付けて**いくと，同じ**模様**になって面白いな。（魅了）【直観】
A児：曲げる向きによっても**模様**が変わるから，それらを交互に並べるのも面白いね。（魅了）【直観】【多面】

見通し　拡散

工夫の見通し

T：気付いた工夫するポイント（造形的な視点）で，自分の表現に生かせることはないかな。
A児：**柱や壁の模様**を，凸凹の面を使ってもう少し工夫できそうだな。すると，もっと二つの塔の違いがはっきりしそう。【拡散】【見通し】
C：**模様の向き**を揃えてみると，**左右のバランス**がよくなるな。【拡散】
A児：土台の柱をもっと**太くすると丈夫に**なりそうだな。【拡散】

【相互鑑賞後の制作】



② 友達との相互鑑賞を通して，**模様**の面白さに気付いている。左記のＡにあるように，**模様**という造形的な視点と自分のイメージを関係付けて表現していた。
② 丈夫さを工夫するために，ぐらつかないように補強の仕方を考えていた。
③ 友達の表現の面白さを味わい，造形的な視点を見いだせたことで，比較鑑賞するよさを実感し制作中も継続して鑑賞する姿があった。

図５　実践の具体化

【作品の完成】

① イメージを明確にしながら実際に作品に表現できたことに歓喜し，友達と喜びを共有している姿があった。
② 塔そのものの円形と四角形といった**形の対比**や，**高さのバランス，模様の組み合わせ**を工夫して，未来と過去の塔を表現したいという思いを作品に表現していた。
③ 形の組合せや模様，高さ，曲げる向きなどの多様で造形的な視点を生かして自分なりの造形的な意味や価値となる，表現の工夫や作品のよさや美しさをつくりだしていた。

図６　実践の具体化

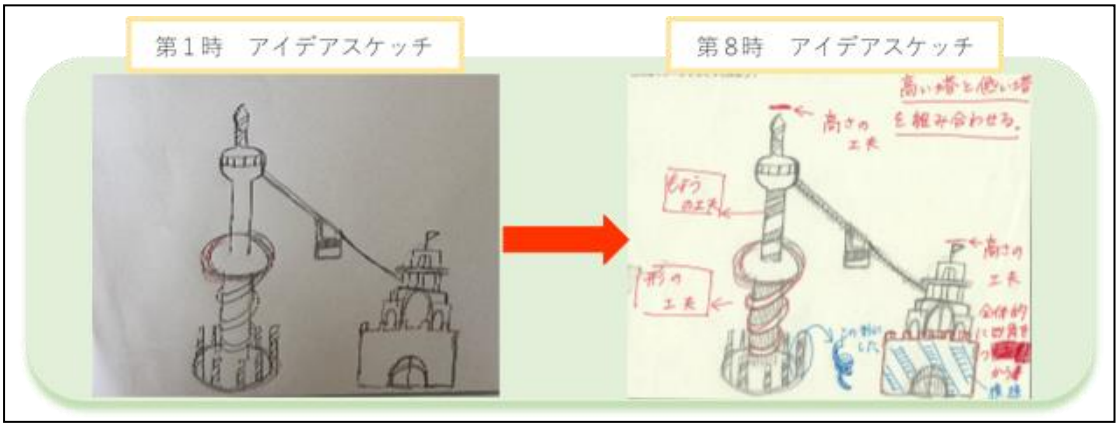


図７　アイデアスケッチの変容

3. 実践の考察

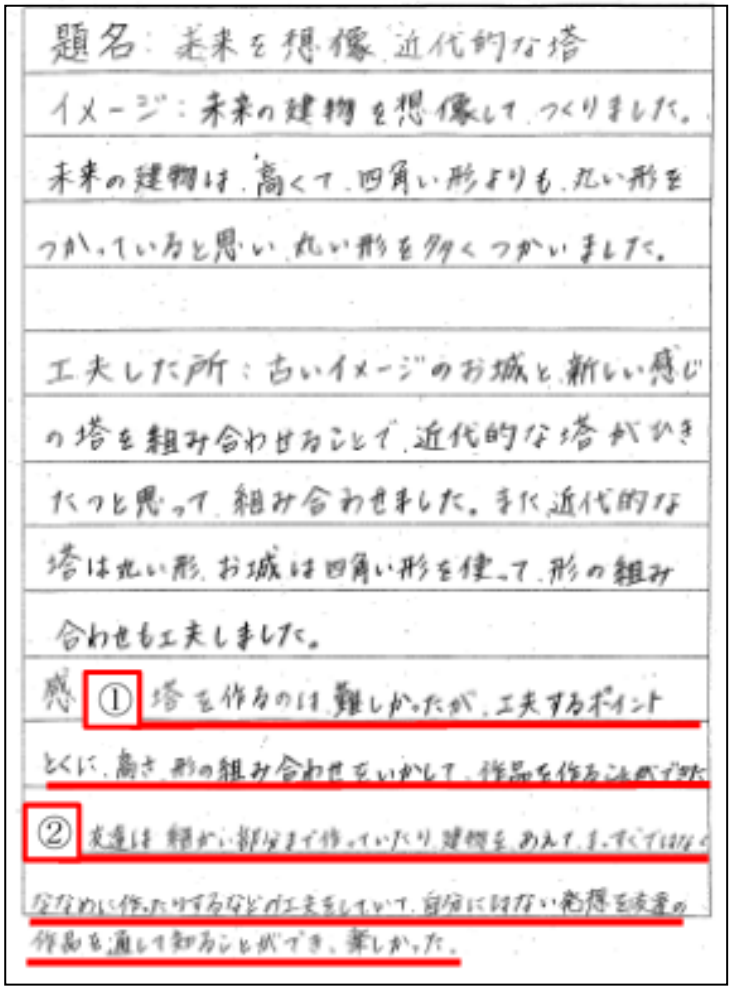
本実践において，表現の際の造形的な視点や思考方法を具体化したアイデアスケッチや表現過程の子どもの言動，作品を分析し考察を以下のように整理した。

図７の第８時のアイデアスケッチ（赤字・青字）にあるように，見いだした造形的な視点を，自分の表現とどのように関係付けるかを明確にすることができていた（図７）。この姿から，多様な表現を比較して造形的な視点を見いだし，自分のイメージに関係付けていく思考の過程を子どもなりに可視化していることが分かる。結果，子どもの表現を豊かにしていくことができた。

図８の学習の感想を分析すると，①にあるように，困難さを味わいながらも表現を達成できたことに歓喜するといった感動を伴いながら表現の工夫や自他の表現のよさや美しさといった自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしていることが分かる。そして，どのような造形的な視点でどのように考え，表現したのかという学びを可視化させたことで，学び方のよさを実感していることが読み取れる（図８）。

また，②にあるように，他者の表現と比較鑑賞し新たな造形的な視点を見いだすといった学び方のよさを自覚している姿も読み取ることができる。さらに，友達と学び合い，表現できたことに歓喜している姿が読み取れる（図８）。

今後は，子どもが思いをもったり味わったりする場面など，多様な場面での学びの可視化を図りながら，指導方法を工夫し，子どもが自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづけていくことができる手立てを明らかにしていく必要があると考える。


題名：未来を想像 近代的な塔

イメージ：未来の建物を想像して つくりました。
未来の建物は 高くて 四角い形よりも 丸い形を
つかっていると思い 丸い形を多くつかいました。

工夫した所：古いイメージのお城と 新しい感じ
の塔を組み合わせることで 近代的な塔がかき
たいと思って 組み合わせました。また 近代的な
塔は丸い形 お城は四角い形を使って 形の組み
合わせも工夫しました。

感 ① 塔を作るのは難しかったが 工夫するポイント
とくに 高さ 形の組み合わせをいかして 作品を作ることができた
② 友達は 細かい部分まで作っていたり 建物をあみ目 まっすぐではな
くなめに作ったりするなどの工夫をしていて 自分にはない発想を友達の
作品を通して知ることができ 楽しかった。

図８　学習後の子どもの感想

【付記】

本報告は，鹿児島大学教育学部附属小学校令和３年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき，図画工作科において研究をさらに発展させ，その研究成果をまとめたものである。